企業

仙台市

救援物資配送と津波被害の廃棄物処理。同業者の支援に支えられて。

小幡 秀樹 株式会社サイコー 総務部総務課主任

取材日 2011.5.19

自然にやさしく、明るく豊かな未来を創造していくエコロジー産業を志向してリサイクル事業を展開している。小中学生の施設見学の受け入れ、地域イベントの出展など環境教育や啓発活動にも取り組む。震災では産業廃棄物の中間処分場である仙台港資源化センターが被災。できることをしようと残されたトラックで救援物資輸送の支援に取り組んだ。

3月11日　14時46分

私が勤務する仙台市宮城野区岩切の事業本部では、これまでに経験したことのない強く長い揺れを感じた。道路はところどころ液状化したりマンホールが飛び出し、尋常でない事態だと感じた。
その頃、仙台港付近の工業団地内にある当社仙台港資源化センターでも、建物の倒壊は無かったものの周辺すべてが停電し、すぐに津波警報が発令されたため、センター勤務の社員は全員でトラックの荷台に乗り合わせ、海から離れるように避難。やがてすぐに渋滞に巻き込まれたためトラックを乗り捨て、徒歩で岩切の事業本部まで向かっていた。途中、大地震にどうして良いかわからずさまよっていた10人ぐらいの中学生グループを見かけ、危険防止のためには一緒に行動したほうが良いと判断し、声をかけて彼らと一緒に歩いて事業本部に向かった。
夜になり、渋滞に巻き込まれながらも回収業務から帰ってくる社員の安否を確認しながら明日からの対応を話し合った。自宅が津波の被害にあった4名の社員は会社に泊まることにした。中学生グループも事業本部に泊めることを考えたが、近所のコミュニティセンターが避難所となっていたためそこへ送り届けた。当日は雪がちらつくような寒さだったが、幸い事業本部にはドラム缶やパレットがあり、パレットを割って薪代わりにしてドラム缶の中で燃やし暖を取った。ドラム缶を囲むようにトラックを並べ風よけにして、それぞれの家族や親せきの安否を確認しあいながら夜を明かした。

翌日から

翌日、事業本部内に「災害対策本部」を設置した。安否確認、燃料調達、食料調達、顧客対応、処分場確認などの班に分かれそれぞれ情報収集しながら対応にあたることにした。
ガソリンスタンド復旧の見通しが全くなかったため、遠方の社員は自宅待機とし徒歩や自転車で通

える社員を中心に復旧作業を行った。トラックは残っていたため、燃料さえあればトラックで仕事はできる。専務が仙台JCの理事長を務めていることもあり、緊急車両の指定を受けて14日ぐらいから栗原、登米、大河原などに向け、救援物資配送の支援を始めた。トラックを運転するドライバーは自宅が津波被害を受けた社員が中心で、自分の家のことを思うとつらい部分もあっただろうと思うが、とにかく自分たちが今できることをやっていくという趣旨を理解し、頑張ってくれた。また、自宅からおにぎりやみそ汁を差し入れてくれたり、県外の親戚が持ってきてくれた食料を持ち寄ってくれる社員もおり、皆で助け合いながら日々を過ごした。

業務再開への苦労

震災直後からお客様からの強い要請を受けて事業系のゴミの収集ができないか役所関係とかけ合ったが、なかなか動きが進まない。まずは人命救助、ライフラインの復旧が先決ということでゴミの処分は後回しとなっていた。お客様からは、停電で溶けてしまった冷凍食品、賞味期限の切れた商品、落下やほこりなどで傷んだ商品の廃棄を求められても、処分場が事業系のゴミを受け入れることができず、燃料不足もあってなかなか回収すら進ま

なかった。
いまだに賞味期限切れや津波被害を受けた食品などの廃棄業務が続いている。見るとまだ食べられそうなものもあるが、万が一のことを考えると店頭に出すことができない。お客様、私たちも葛藤を感じながらも、できる限り堆肥化する、飼料化するなどの処理方法を全国の処分業者とやり取りしながらの対応となった。

支援のパッカー車

つらい話だけではなかった。震災翌週には全国の同業者から米やその他食糧、水などがトラック1台分いっぱいにまとめられて届いた。また、トラック5台を津波で失ったものの、この状況を全国の同業者に知らせ車両の貸与を呼びかけていたところ、トラックの貸し出しや支援物資の提供など全国からいろいろな支援の申し出があった。その中で岐阜県の産業廃棄物処理業者ジャパンクリーンサービス様が、新車のパッカー車（ゴミ収集車）を貸してくれることになった。届いたパッカー車を見て、社員全員が驚いた。車体には岐阜の小学生160人から集めた応援メッセージがプリントされていたのだ。さらにイラスト作家・森島知子さんのイラスト、文字職人の杉浦誠司さんが書いた「めっせー字」が車体一面に広がっている。「絆」という文字は、「しんらいする」というひらがなで「絆」と書かれている。もう一文字、「望」は「あきらめない」というひらがなで書かれていた。新車のパッカー車を貸してもらえるだけでもありがたいのに、この想像を超えた取り計らいに、社員全員が感動し、元気と勇気をもらった。日頃の心の通ったお付き合いの大切さを身にしみて教えられた。

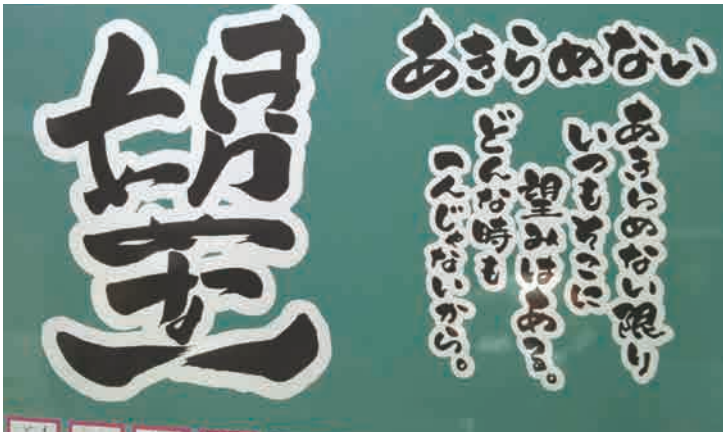
2ヶ月が過ぎて

仙台港にある資源化センターは現在復旧作業中で、先週ようやく電気が通ったような状態。今は機械に電気を入れ稼働テストを行っていて、6月以降、機械を動かせるものから順次業務を再開していく予定だ。とにかく1日も早い復旧に向け、全社員で取り組んでいる。
震災後、会社の結束力は一段と高まった。この困難をみんなで乗り越えられたことを誇りに思う。また全国の同業仲間にも助けられ、当初の予想よりは奇跡的なスピードで復旧作業は進んでいる。震災復興スローガン「元気・勇気・挑戦！がんばろうサイコー！」を掲げ、自分たちの復興の姿が、お客様や地域にも勇気を与えられるよう、社員一丸となって頑張っていきたい。

撮影：2011.3.15　津波で流されたトラック

撮影：2011.3.13　社員を集めて朝礼

撮影：2011.4.21　応援メッセージ入りパッカー車



撮影：2011.4.21　めっせー字「望」あきらめない